えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ㉑②

知名美久佐

伊予の俳人158人を紹介



伊予の俳人らの姿を発句とともに記した「知名美久佐」

＝1845年、県歴史文化博物館蔵

「知名美久佐（ちなみぐさ）」は松山魚町播磨屋半兵衛＝俳号・烏岬（うこう）＝が編集した俳諧の書物である。巻頭には、松山藩の家老を務めた奥平貞臣＝俳号鶯居（おうきょ）＝が1845（弘化2）年初春に記した序文が入っている。

烏岬は7万余りの発句を集め、その中から優れたものを江戸の宗匠である田川鳳朗ら4人に選ばせ、大山祇神社（今治市）、出石寺（大洲市）、厳島神社（広島県）などに、100余りずつ奉納している。奉納する発句を集めるために、援助してくれた俳人への感謝として、画工に肖像を描かせ、併せて発句も記して一冊にまとめたものである。

本書には伊予の俳人158人が紹介されているが、藩領ごとに人数を記すと、松山藩領88人、大洲藩領16人、西条藩領16人、今治藩領14人、小松藩領13人、宇和島藩領6人、吉田藩領2人、新谷藩領1人、幕府領2人となる。身分については、奥平鶯居のような武士が18人と少なく、城下町・在郷町の商人、農村部の上層農民が大半を占める。

女性が5人掲載されているのも興味深い。烏岬が発句を集めるのを助けた会林（世話人）、願主（出資者）は、いずれも松山城下、萩生村（新居浜市）、菊間村（今治市）、南方村川上（東温市）から出ており、これらの地域の俳諧の小結社が核となり、事業が進められたものと思われる。

本書の特徴になっているのは、画工東南が俳人を訪ね歩いて写し取ったとされる肖像の数々。手数の少ない墨の描線でありながらも、それぞれの俳人の姿が巧みに表現されている。本を読む、生け花をいける、一弦琴を弾く、碁を打つなど、ポーズも人それぞれ。こうした描写からは、俳諧にとどまらない、江戸時代後期の多彩な地域文化の様相がうかがえる。

巻末には「蕉門御集冊摺物師」として京都の四条通寺町の湖雲堂こと、近江屋利助が記されている。蕉門は、松尾芭蕉に共鳴した俳人の流派。江戸時代の俳書のほとんどが自費出版であったが、湖雲堂は、蕉門の俳人が全国各地でおこなう出版活動を助ける本屋である。本書は、遠方の蕉門の俳人が伊予を訪れる際の便利な人名録にもなっていたのであろう。

（学芸課長・井上淳）

〈随時掲載します〉

掲載許可番号：d20230301-04